
「ジェンと僕」

巡芳もとめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ジエンと僕」

【Nコード】

N0278Z

【作者名】

巡芳もとめ

【あらすじ】

僕が七歳のときに出会ったジエンと僕との物語。

僕はいま七歳です。

お母さんが夜に働いているので、ベビーシッターをする人がききました。

「責任持ってお預かり致します」

とお姉さんはニコニコして言いました。お母さんもニコニコしてお化粧をして出かけていきました。

でもお姉さんはお母さんがいなくなったら笑わなくなりました。

テレビをつけてタバコを吸いはじめました。

「お姉さん、なんて、いうの？」

僕はお姉さんの名前を聞きました。お姉さんは、芸能人のほりきたまきさんにそっくりです。でもほりきたさんとちよつと違って不良みたいな感じです。髪も茶髪です。

「名前？ ジエニファーよ」

お姉さんは言った。

「外人……なの？」

外人には全然見えません。

「芸名みたいなものだよ。あんだ、喋り方がずいぶんトロいね」

「と……ろい？」

「のろいってこと。もっとハキハキ喋れないの？」

僕ははやく喋ることがとても苦手です。

「ジエニファーって……言いにくいよ、長いし……」

「ジエンでいいわ」

ジエンは早く喋るので、僕が喋る順番がすぐにまわってきてしまいます。

「あんたの名前は？」

「……む、さ、し」

「そんなイガグリ頭で。ずいぶん名前負けしてるわ、あんだ」

「まけ？」

「あんたはどつちかって言うと、そうだなあ、あつ、カツオって名前が似合ってるよ。もしくは、タラオ。あれ、サザエさん知らないの？ テレビでやってるアニメあるでしょ」

僕はテレビはあまり見ないのでわかりませんでした。

「……わかんない」

「じゃあ、あんたは今日からカツオね」

「そんなの、お母さんが……変だと思うと……思うよ」

でもジエンはお母さんの前では僕をむさしとちゃんと呼んでいました。

ある日、ジエンは、

「カツオ、遊びに行くぞ」

と言つて僕の手をひっぱりました。外はもう夜です。僕はすごく嫌だったので、玄関のドアにつかまりました。でもジエンの力は強すぎて勝てませんでした。

僕はジエンと電車に乗って、都会のビルがたくさんあるところに行きました。いろんな色の電気がたくさん光っていて怖くなりました。「カツオ、いいところに連れて行ってあげようか？」

ジエンはニコニコして言いました。

「……どこ？」

「超楽しいとこだよ」

ジエンと僕は手をつないで歩いた。なぜかわからないけど僕は楽しい気持ちになってきた。

そしてジエンは大きなビルの中に入って行きました。中に入るとジエンの友達みたいな人たちがたくさんいました。おとも女もたくさんいて、たぶん十人くらいはいると思いました。あるお兄さんが僕の頭をなでました。

「ここは、なにをする……ところなの？」

僕は部屋をよく見ましたが、分かりませんでした。そこは学校の

校長先生の部屋に似ていました。

「ここは超楽しい気分になれるとこだよ」

ジェンはポケットから何かを出してテーブルに置きました。他の人たちもです。

ジェンもみんなもテーブルに小麦粉みたいな砂糖みたいな粉をまいて、ストローみたいので吸っています。

「それ……なに？ お菓子？」

僕はジェンの隣に座りました。いつもは怒った顔ばかりするジェンですが、今日はとても優しく笑っています。

「あんたもやる？」

ジェンが言いました。ジェンは笑っているのに、なぜか涙が出ていました。

「ジェン……どうしたの？ 泣いてるの？」

僕が聞くとジェンは僕にぎゅっとだきつきました。泣いているみたいです。ジェンが泣いてるのを僕は見たことがなかったのでびっくりしました。

そしたらまた誰かが部屋に入ってきました。

それは警察の人たちでした。

僕は警察の人の車に乗ってお母さんのところに戻されました。ジェンは警察の人たちとどこかへ行ってしまい、僕の家にはもう来てくれませんでした。

ジェンがなんで泣いていたのか聞きたかったけど、もう来てくれないのかなと思いきしくなりました。

「……僕、また、ジェンに、会いたいよ」

「ジェン？」

お母さんは僕に聞きました。ジェンの本当の名前は“たちばなあおいちゃん”だとお母さんが教えてくれました。

それから月日が経って、“僕”は二十三歳になり、母親がアル中で精神不安定な生活を送るようになってたつてのもあつて精神科の医者を目指すようになり、小さな病院ではあるがその精神科に就職した。

今の俺にならもちろん理解できる。ジエンがあの日、仲間たちと何をしていたか。あのあと彼女はどうなつてしまつたのだらう、とこれまでずっと考えて俺は生きてきた。

ジエンと過ごした短い日々を俺はあの日、作文にして、クラスでの発表会のときにみんなの前で読み上げた。担任は複雑な顔をしていたが、俺はあの日々をなかつたことにしたくなかつたし、忘れなくなかつた。だからあえて大勢の前で発表した。

その日も俺は、後を絶たない、心の苦痛に助けを乞う患者達に対応しあつという間に一日が終わろうとしていた。

少し休憩でもしようかと思つたとき、診察室のドアを誰かがノックした。

「あの、予約とかはしてないんですけど、だめですか？」

一人の女性。笑いながら部屋を覗いてきた。

「あ、うーん。まあ、いいですよ。そこに掛けて下さい」

脱ぎかけていた白衣を俺はもう一度着直すと、彼女の前に座つた。簡単な質問がざつと書かれた用紙を彼女に手渡す。彼女はガムを噛みながら、紙の上にさらさらとペンを滑らしている。

「出来ました、先生」

彼女は元気よく手を上げて言った。

俺はその用紙を受け取り、一瞬思考が止まつた。

「…………… たちはな…………… あおい」

思わず口に出して読む。

「どっかで会つたっけ先生？」

彼女は俺の顔を覗き見る。

その顔。それはどう見ても、まぎれもなく、あの“ジエン”だつ

た。

「ジエン……」

俺の口から出た言葉を耳にした彼女は、はっと息を飲んだ。彼女も俺の顔に、昔の俺の面影がよぎったのかもしれない。

「……カツオ？　嘘でしょ？　え、カツオだよ、あんた？」

俺はなぜだか笑いがこみあげてきて笑った。彼女も笑い出す。

「カツオってのもうやめてくれる？　俺の名前は武蔵だから」

俺が笑いながら言うと、

「ふーん。“俺”なんて言うようになったんだ、あんたも？」

と俺の頭を軽く叩き、「今なら名前負けしてないわ」と付け加えた。

俺は患者と接しているということをしつかり忘れ、コーヒーを飲みながらジエンといろんな話で盛り上がった。

「あんた、今ならもちろん分かるんでしょ？」

「何を？」

「私がやってたことだよ」

「ドラッグね」

うん、と小さく呟く彼女は、昔と変わらず綺麗だった。

「ジエンはあのと時何歳だったの？」

「二十歳」

てことは、今のジエンは三十六歳ということか。

人間は不思議なものだ。あの頃の七歳の俺と二十歳のジエンが、もしも万が一、彼女彼女という仲でいたら、まわりから確実に変態扱いされただろうに、今の二十三歳の俺と三十六歳のジエンが肩を並べて歩いていても、そこまで変には思わない。それにジエンはまだ三十歳くらいの容姿に見えた。

「ところで、なんで武蔵はこんなところにいるの？」

ジエンは診察室を見渡しながら笑って言った。

「まあ、いろいろとね」
「ふーん」

それからどういう成り行きか、なんとなく、というか自然に、俺はジェンと付き合ひ出していた。

向こうもそういうことをはつきり口に出して言ったわけでもないのだが、ジェンも俺と一緒にいたがっつてるといふことを、俺ははつきりと感じた。

「いつまでジェンて呼ぶの？」

俺の部屋で同棲しはじめたジェンが、真っ暗な部屋の中、ベッドの上で呟いた。

「もう寝てるかと思った」

半分寝かけていた俺は目を開けた。

未だに俺は彼女のことをジェンと呼んでいる。本名で呼ぶ方が違和感がありすぎるくらい、彼女はジェン以外の何者でもなかった。

「ジェンて呼ばれるの嫌なの？」

「ううん。好きだよ」

「じゃあ、いいじゃん」

ジェンは少し微笑んで俺に抱きついた。

「あん時さ」

俺はあん時を思い出しながら喋り出す。

「あん時ってどの時？」

俺にしがみついていたジェンは顔を上げて言った。

「最後に会った日。なんで泣いてたの」

このことに触れるべきか迷ったが、ずっと長い間気になっていたことだったので、聞いてしまった。

「あんたをあんな場所に連れていった自分のバカさに嫌気がさしてさ……」

ジェンはもう一度俺にしがみついて言った。俺の胸に顔を埋める彼女の声はくぐもっている。また泣いているのだろうか。

「今はもうやってないんだろドラッグとか」

「やってないよ。その日を最後にやめた。すごくすごく反省した。だから神様はさ、また武蔵とこうして再会させてくれたんだよきつと。本当に反省したからね」

俺に抱きつくジエンの両手から、温かいものを感じた。

「カツオ」

急に昔のあだなで俺を呼ぶ彼女。

「カツオって……」

苦笑いする俺。

「あのイガグリ頭のカツオが、こんな大人の男になっちゃうなんてねー」

ジエンはそう言っただけの頭を撫でる。

むずがゆさと変な愛おしさがごちゃ混ぜになり、俺は笑う。

なぜ精神科に来たのかとジエンに問うと彼女は「あんたに会ったらもう大丈夫になった」と答えた。

そして彼女は、

「武蔵、今は普通にハキハキ喋れるようになっただね」

と言った。成長する過程で改善されたんだよ、と答えておいたが、本当は、七歳のときにジエンと会って彼女の会話に追いつくため、彼女ともっとたくさん多くの会話をかわしたいがため、俺は彼女と会えなくなったあととまずつと普通で喋るよう努力していたのだ。

翌年の夏。

白いウェディングドレスを身にまとったジエンは言う。

「招待状の名前のとこさ、カツオとジエンにすればよかったかもね」「それはやめてくれ」

結婚披露宴。扉の前に並んだ両家の名前を見て、ジエンが今言ったことを想像し俺は笑う。

きつとこれからも一生、俺は彼女をジエンと呼び続けるんだろう

なと思い、もう二度と離れたくないし、これからは一緒に生きていけるということを思い、俺はこの自分のすぐ隣にいる人を本当に大好きだとあらためて思った。

「ジエンとカツオです」

マイクを握りしめ声を大にして言う彼女に、会場から笑いがわき起こった。

黒い雅な着物を着た俺の母親も笑っている。

神様、彼女を俺の元へ運んできてくれてありがとう。

楽しい時間はまだまだ続く。ずっと会えなかったこの年月を埋めるようにそれはずっと続く。

“僕はもしもまたジエンにいつか会えることができたら、ジエンをお嫁さんにしたいです。そしてもっとちゃんと早く喋れるようになれるようにがんばります”

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0278z/>

「ジェンと僕」

2011年12月1日01時49分発行